関西学院大学新聞
2025年11月25日 第870号
KG PRESS
■発行■
関西学院大学新聞総部
〒662-0891
西宮市上ケ原一番町1番155号
HP: www.kgpress.jp
X: @KG_shinbun
Instagram: kg_newspaper_club

歌がつなぐ百年の絆

クロアチアナショナルデーに出演

関西学院グリークラブ

大阪・関西万博が10月13日に閉幕した。50年ぶりに大阪で開催された万博では関学生・団体の活躍が数多くあった。新聞総部が取材を通して見た184日間の万博を振り返る。（関連記事は4～5面）

関西学院グリークラブは9月21日、クロアチアナショナルデーに出演した。ナショナルデーではクロアチア共和国、日本国の両国歌、そしてクロアチアの愛唱歌「U Boj!（ウ・ボイ）」を披露した。同国のアンドレイ・プレンコビッチ首相も参列するなか、グリークラブは大舞台での公演となった。

出演のきっかけは、6月に駐日クロアチア大使が本学を訪問した際の打診だった。グリークラブはこれまで、大使館関係者との120周年記念リサイタルなどを通じて親交を深めており、こうした関係が今回の出演につながった。

「ウ・ボイ」はグリークラブがチェコの兵士から100年以上前に伝えられたことを機に日本の男声合唱団に広まった曲だ。そのためグリークラブが伝統的に歌っているのは「ウ・ボイ」の伝承版。今回のナショナルデーのためにクロアチアで歌われている正規譜版を練習し披露した。歴史的な経緯もあるこの曲は、グリークラブにとって特別な曲だ。部長の廣田義宗さん（文学部4年）は「ウ・ボイ」を「関学グリーの象徴みたいな存在」と語る。

また、今回披露したクロアチア国歌の斉唱は、過去のクロアチア公演以来の経験だった。団員たちはクロアチア語特有のアルファベットの発音などに苦戦しながらも見事に完成させた。

廣田さんは「万博という特別な場所で歌えたことは一生の宝物。音楽の力を改めて感じた」と振り返る。普段グリークラブの演奏に触れる機会の少ない国内外の来場者にその歌声を届けられたことも大きな成果となった。

関西学院グリークラブは、万博での経験を糧に、今後もさまざまな舞台での演奏や、来年2月に予定されている定期演奏会に向けて練習を重ねていく。（田爪翔）

関西学院グリークラブのクロアチアナショナルデーでの公演＝同団体提供

若者でつなぐ秋の献血週間

宗教総部献血実行委員会は10月16日と17日、西宮上ケ原キャンパスで秋の献血週間を実施した。2日間で計274人が献血に協力し、24人が骨髄バンクドナー登録を行った。

献血実行委員長の田中真乙（まさき）さん（商学部3年）は、今回の活動から新たに委員長を務めている。就任にあたり、「委員会の人もドナーの人も、関わるすべての人が楽しく参加できる活動を心がけている」と語る。委員会では、先輩、後輩といった立場にとらわれず、全員が気持ちよく取り組める雰囲気づくりを心掛けている。

山下美聖（みさと）さん（商学部1年）は「一人でも多くの人に献血への協力を呼びかけたい」と語り、献血の意義を広く伝えるため、声掛けに力を入れた。外での声掛けは天候の影響を受けるが「雨が降っても元気に呼び込みをしたい」と話し積極的に活動した。

日本赤十字社の平成27年から令和6年までの血液事業統計によると、30代以下の献血協力者数は平成27年の約203万人から令和6年には約160万人に減少し、およそ2割減となっている。田中さんは「若者が減れば、高齢層が年齢制限で抜けたときに支える人がいなくなる」と危機感を示す。

そうした中、今回は高校生の姿も見られた。高校の探究活動で献血について調べることになり、関学大の献血実行委員会と連絡を取ったことをきっかけに、今回の献血に参加したという。

若い世代の新たな関心は、献血離れが進む社会の中で希望の兆しといえる。

次回の冬の献血週間は12月4日と5日に、西宮上ケ原キャンパスで開催される予定だ。（中泉奏士）

秋の献血週間の様子＝10月16日、西宮上ケ原キャンパス、杉谷拓樹撮影

中期留学ミニガイダンス

～先輩の声を聞いてみよう！～

国際教育・協力センター（以下CIEC）は7月2日、西宮上ケ原キャンパスG号館2階フジタ・グローバルラウンジで中期交換留学イベント「中期留学ミニガイダンス～先輩の声を聞いてみよう！～」を開催した。

CIECは異文化を理解し、多文化共生という理念に基づいて、多種多様な海外留学プログラムと異文化交流イベントを提供している。今回のイベントは交換留学に行った申先鎬（しんそんほ）さん（国際学部3年）と上原愛さん（人間福祉学部3年）が、留学に向けての心得や留学先での経験などを発表した。

発表後の質疑応答で、交換留学に興味を持つ学生全員が聞いたのは留学の費用、現地での生活、成績という3つの要素だった。金銭面に関して申さんは、留学のために事前に貯金しておくことは大切なことのひとつだと語った。現地での生活は、2人とも食生活について不慣れだったと経験を語った。成績については、行き先によって異なるため、詳細はCIECの説明会に参加するべきとCIECの職員がアドバイスを送った。

その後、2人はインタビューの中で、「留学中はさまざまな困難もあったが、それ以上に貴重な経験ができ、一生の思い出になった」と振り返った。また、留学を目指す学生に対し、「興味のある後輩の皆さんは、ぜひこのチャンスを逃さないでほしい」とメッセージを送った。（範沢衆）

上原さんが話している様子＝7月3日、フジタ・グローバルラウンジ、範沢衆撮影

万博特集最終回

4、5面
愛媛特集

6、7面

自然の恵みから手作りの香水を
～調香師体験会開催～

学生団体のperfume partyが10月4日、5日に千刈キャンプ場（兵庫県三田市）で、自然の植物から香水を作る体験会を開催した。体験には子供から大人まで多くの人が集まった。

参加者は、キャンプ場内にある森でスギやヒノキなどを、ハーブ園ではゼラニウムやカモミールなどを摘み、それらをつぶして香りを抽出する作業を行い、自分だけの香りを製作した。参加した清水咲希さん（20代）は「自然の中で非日常を味わえた。（ハーブを）潰して匂いを確認しながら調整するのが楽しかった」と笑顔だった。

これまでは行き場のない香水を持ち寄って交換する香水交換会を多く開催してきた。今回は、想像がつきにくい「香りの原点や貴重さ」を知ってもらおうと、初めて一般の参加者も募った体験型のイベントを開催。代表の大道碧衣さん（商学部卒業）は、「ハーブ園は、このイベントのために一から作りました」と明かした。

活動の幅を広げていても「もったいない」を減らそうという意識を持ち、身近なところから行動を変えてほしいという思いは変わらない。

そして、参加者を楽しませること、自分たちのメッセージをより効果的に発信するということも変わらないと話す大道さんの姿が印象的だった。

perfume partyの存在を徐々に認めてもらっていると感じる大道さんは、今回の体験会をperfume partyにとってのステップアップと位置付けている。「香水を通じて、何かを感じ取ってもらい、少しだけ日常が豊かになればいいな」と笑みがこぼれた。

perfume partyはこれからも、少しの気づきと少しの豊かさをじんわりと広げていく。

（森友紀・八島みのり）

植物をすり潰す様子＝10月5日、千刈キャンプ場（兵庫県三田市）、八島みのり撮影

キャリアセンター職員に聞く
キャリア一問一答

インターネットはキャリアに関する誤情報や大学生の不安を煽るような情報であふれている。キャリアセンター職員の石谷さんが大学生の抱く疑問や不安を一刀両断する。

Q近年の就職活動の特徴は？

A早期化、長期化、多様化が特徴。インターンシップからの早期選考を行う企業が増えたことで、早い段階で企業に内定する学生が多くなった。内定後も就活を継続する人が多く、長期化に繋がっている。

Q学部によって就職活動に違いは？

A文系学部間での違いはほとんどなく、就職に有利な学部、不利な学部のようなものはない。様々な経験やチャレンジを通じて、自分の社会人基礎力や人間性を磨くことに集中してほしい。

Qインターンシップって何？

A学生が企業で就業体験を積むプログラムのうち、5日間以上のもの。学生がその仕事に就く能力が備わっているかどうかを見極めることを目的に、関心分野や将来のキャリアに関連した就業体験を行う活動だ。学生は仕事内容や業界への理解を深め、自分の適性を知ることができる。さらに、体験を通じて社会とのギャップを埋めることも可能である。また、本来の目的から離れて、企業の選考の一部となっているものもある。

Q1、2年生が就職活動に向けて取り組むべきことは？

Aあまり就職活動を意識しすぎないほうが良い。大学生活の中で様々な人と関わり、多くのことを経験して、人として成長してほしい。おすすめなのは部活やサークルといった集団に所属すること。集団での役割を全うすることで、自分の適性を知ることもできる。この経験が将来の就職にもつながる。キャリアセンターが企業・団体と開催している職場見学プログラム「Shigoto☆trip」やビジネス体験プログラム「BizCLASS」に参加するのもおすすめ。（杉谷拓樹）

目指せ社会人基礎力の養成
就活のすゝめ

大学生は、就職活動への関心こそ高いが、正確な情報が不足している。そこでキャリアセンター職員の石谷さんとキャリアについて学び、考えよう。

多くの人は、3年生の春ごろから就職活動を始める。それまでに社会人基礎力を会得しなければならない。社会人基礎力は経済産業省が提唱する、仕事における基礎的な力だ。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力から構成される。

石谷さんいわく「社会人基礎力は一朝一夕で身につくものではない。人と関わり、経験を積むことで身につくもの」とのこと。加えて、関学生が共通して身に付けるべき知識・能力・資質であるKwanseiコンピテンシーも意識したい。授業やサークル活動のような大学生活によって育まれる能力だ。

さらに自己分析をすることも必要だ。これまでの自分を振り返り、今の自分を見つめ、これからのキャリア形成へとつなげていくことが求められる。

石谷さんは「自己分析とは、人生の棚卸だ。これまでの経験や成果、価値観などを整理するプロセスだと思う。自分にとっての幸せを見つけてほしい」と説明した。さらに「キャリアとは、就職や出世のようなことだけでなく、どのような人生を送るのかということだ」と人生設計の重要性を強調した。

就職活動に向けて、一歩踏み出したい学生に勧めたいのが、キャリアセンターSlackチャンネルだ。当チャンネルでは、自分にピッタリの就活セミナーやプログラム、インターン等の情報を受け取れる。重要な情報や機会を見逃したくない人はぜひ活用してほしい。（杉谷拓樹）

一日の終わりに平和を祈る
夕の礼拝

参加者と共に賛美歌を歌う打樋宗教総主事＝10月21日、関西学院ランバス記念礼拝堂、杉谷拓樹撮影

関西学院と関西学院宗教活動委員会は10月21日、西宮上ケ原キャンパスの関西学院ランバス記念礼拝堂で夕の礼拝を挙行した。夕の礼拝は2025年度の5月から始まり、3回目の今回は約70名が参加した。

夕の礼拝は学生のみならず、教職員や近隣の住民も参加することができる。参加者はオルガンの演奏に耳を傾け、賛美歌を歌い、平和を祈った。

今回の礼拝で参加者は、日本語だけでなく多言語で表記された賛美歌を受け取った。これは、共通の歌を様々な言語で歌えるようにするための試みだ。神学部の水野隆一教授は、「共通の信条を求めること、共通の歌を歌うことを諦めないでほしい」と説いた。

夕の礼拝はチャペルアワーよりも長い、約1時間かけて執り行われた。式次第に聖書の朗読や説教も組み込まれた、より本格的な礼拝の場だ。司式を担当した打樋啓二宗教総主事は、キリスト教学を学ぶ関学大の学生に向けて、「知識として知るだけでなく、（礼拝の）空間や雰囲気を体験して、感覚的に得られるものを大事にしてほしい」と語った。

キリスト教には夕方の礼拝を大切にする伝統がある。打樋宗教総主事は、「日が落ちて夜になる時間帯に人間は不安になる。だからこそ礼拝堂で安らぎや翌日への希望を見つけてください」と表情を緩めた。

今後の夕の礼拝は、12月9日に開催予定だ。

（八島みのり）

知って語る 大岡ゼミ 西宮酒ぐらルネサンスにPOP展示

社会学部の大岡ゼミのチームOKURUは、10月4日、「第29回西宮酒ぐらルネサンスと食フェア」の会場であった「日本盛 酒蔵通り煉瓦館」にて、POP展示とアンケート調査を行った。

POPは、パーソナリティからおすすめのお酒を診断するきき酒診断やおすすめの日本酒、日本盛の歴史など、内容もデザインもクオリティが高く、日本酒ファンの人目をひいていた。POPの作成にあたっては、日本盛の社員の方にインタビューを行ったほか、夏休みあたりから毎週2～3回程度Zoomで長時間議論して内容を決めた。また、これからの活動に活かすためのアンケート調査を行った。

社会学部の大岡栄美准教授のゼミでは、西宮地方卸売市場での再開発をはさみ、足かけ9年マルシェをはじめとする様々な調査実践活動を行っていたが、今年の3月に終了となった。そのため、ゼミ内にある6チームのうち2チームは自分たちで新たにフィールドを開拓することになった。

その中でも、チームOKURUは、日本酒を題材に活動をしている。軸は「知って語る」ことである。地域についての知識を得て語ることが地域愛着につながるという。

この地域愛着は、大岡ゼミのテーマの一つでもある。大岡准教授によると、ゼミの大きなテーマは「つながる場とつなげる人の社会学」である。深い関わりを自然発生的につくることが難しい社会で、どのような場所でどのような活動をすればつながりができるのか、ということを軸に活動をしている。ゼミでの活動を通して地域と関わることが、自分の価値を再確認することにつながる。

ゼミ長である安藝大智さん（社会学部3年）は、「社会人になったら自分が行動しなければ何も起こらない」と考え、フィールドワークを積極的に行う大岡ゼミを志望した。大串佑衣さん（社会学部3年）は、「人と話すことが好きなため、グループとして活動しみんなで何かをやりたかった」という思いから大岡ゼミを選択したという。

安藝さんも大串さんも、これまで日本酒はあまり飲むことがなかったものの、活動に取り組むなかで日本酒の歴史や酒蔵ごとに特色がある日本酒の魅力を知ったという。

安藝さんは「今後もツアーなどのイベントを企画しているので、大学生にも是非足を運んでほしい」と力を込めた。チームOKURUは、これからも日本酒や西宮の魅力を「贈り物」として届けていく。

（今村早織・山須田優）

チームOKURUメンバーと大岡栄美准教授＝10月4日、日本盛酒蔵通り煉瓦館（西宮市）、山須田優撮影

京都で地球環境について考える 山極壽一氏登壇

地域

「KYOTO地球環境の殿堂」国際会議・未来会議が9月20日、国立京都国際会館メインホールであった。地球環境の殿堂とは、京都議定書誕生の地である京都で、世界で地球環境の保全に貢献した人物の功績を称えるものだ。

京都大学総長を経て、総合地球環境学研究所所長（KYOTO地球環境の殿堂）運営協議会会長）である山極壽一（じゅいち）氏（73）による基調講演が行われた。講演の中で山極氏は、人間には「文化」が不可欠であるにも関わらず、SDGs（持続可能な開発目標）には含まれていないことを問題として挙げ、自然環境と密接につながる人間の「文化」の問題こそが地球環境問題の根幹だと訴えた。

その後、株式会社Quiz Knockの最高経営責任者でクイズプレーヤーの伊沢拓司氏（31）が登壇し山極氏との特別対談が行われた。

対談では、山極氏の研究対象であるゴリラについて、クイズを交えながら進行した。山極氏は日本と西洋の自然観の違いに言及し、人間と自然が共存し人間が自然を利用するしくみの重要さを強調した。

さらに今年は京都議定書発効20周年を記念し、未来会議に参加した学生が未来への宣言を発表した。未来会議では、国内外の高校生・大学生が自然環境と京都文化との関係について、5月から8月にかけ、三つのプロジェクトに分かれて探究活動をしていた。

各プロジェクトによる発表後、代表者は環境を守るための決意を込めた「未来への宣言」を山極氏に手渡した。

学生たちによる「未来への宣言」を受け取った山極氏は、「人間の最大の能力は共感力である。若い世代が先人の思いを未来に受け継いでくれることはありがたい」と語った。最後に、「彼らの未来への挑戦に大いに期待したい」と述べて締めくくった。

（八島みのり）

講演を行う山極壽一氏＝9月20日、国立京都国際会館メインホール（京都市左京区）、八島みのり撮影

「未来への宣言」を受け取る山極壽一氏＝9月20日、国立京都国際会館メインホール（京都市左京区）、八島みのり撮影

Re. colab KOBE 元耕作放棄地で芋ほり体験

関学大の学生が中心に活動している団体Re. colab KOBE（通称リコラボコウベ）は、10月26日、かつて耕作放棄地であったファームにてサツマイモの収穫体験を開催した。

20名を超える学生が、完全有機栽培の「すずほっくり」と「パープルスイートロード」の2種類のサツマイモを収穫し、焼き芋を楽しむなどした。収穫したサツマイモの畝（うね）には、微生物が分解できる資材で、使用後の廃プラスチック処理が不要となる生分解性マルチをかぶせていた。

また、サツマイモを収穫した後は、つるをコンポストに活用していた。コンポストとは、生ごみなどを微生物で分解し、堆肥にする取り組みである。同団体では、駆除した外来種のアメリカザリガニやブルーギルなどの外来種の死体もコンポストの材料として活用している。

代表を務める中原由香利さん（商学部3年）に、リコラボコウベの活動について話を伺った。

―リコラボコウベについて

約50名が所属している。現在は山あいにあるかつて耕作放棄地であったリコラボファームでの農業を中心に、学生が主体となって楽しみながら、身近な環境問題などに取り組んでいる。

―リコラボファームについて

農業のなり手の高齢化や人手不足が原因で耕作放棄地が増えている。1年でも放置していると、笹や雑草などが生い茂ってしまう。

この耕作放棄地を農地として再生するところから、リコラボコウベの活動が始まった。里山には人の手が入っているからこそ維持できる生態系があり、里山としての再生を目指している。

―リコラボファームでの活動について

リコラボファームでは、サツマイモの他にも落花生やジャガイモなど様々な作物を完全有機栽培で育てている。

また、作物の栽培の他に、竹林や近くの池でも活動をしている。池には外来種が多いため、元の生態系に戻すことを目標にしている。冬には池の水を抜くプロジェクトを実施する予定だ。

―力を入れている活動について

最近は広報活動にも力を入れている。学生とのコラボや図書館でのポスター掲示も行っている。

（今村早織）

芋ほりの様子＝10月26日、神戸市北区、今村早織撮影

万博特集

大阪・関西万博閉幕

184日間の会期　来場者は約2557万人

「次はいよいよ夢洲です。驚きと感動に満ちた夢洲へ。さぁ、行きましょう」。コスモスクエアを発った大阪メトロ中央線の特別車内放送が、万博会場へ向かう人々の胸を高鳴らせた。

4月13日に開幕した大阪・関西万博は、10月13日、184日間の会期を終えて閉幕した。総来場者数は約2557万人に達し、2005年の「愛・地球博」（約2205万人）を上回る盛況となった。

最終日の夢洲会場には多くの来場者が詰めかけ、各パビリオンでは思い思いの「最終日」を演出していた。各コモンズ館では正面ガラスに多言語で万博へのメッセージが描かれ、オランダ館などでは独自の閉幕セレモニーが行われた。

午後にはフラッグパレードが開かれ、参加国の旗の隊列や公式キャラクター「ミャクミャク」らが会場内約1・4キロを練り歩いた。

夜には約5分間にわたる花火と特別ドローンショーが空を彩り、最後にはミャクミャクも登場。華やかなフィナーレに、会場は歓声と拍手に包まれた。

閉幕後も、万博の熱気は形を変えて続いていく。

会場の象徴だった大屋根リングは、北東部分の約200メートルが大阪市管理のもと周辺エリアを含めて市営公園として保存される。そしてパソナ館、オランダ館が淡路島に、「いのちの遊び場クラゲ館」が広島県福山市になど複数のパビリオンも移設が決定している。

さらに、展示された「空飛ぶクルマ」などの次世代技術の実用化も進められる予定だ。

184日間にわたり多くの驚きと感動を生んだ大阪・関西万博。幕を下ろしても、そのレガシーは未来へと受け継がれていく。（田爪翔）

万博の夜空を彩った閉幕日の花火＝10月13日、夢洲（大阪市此花区）、田爪翔撮影

関学と万博を振り返る

大阪・関西万博では多くの関学生が活躍した。

開幕したばかりの4月、応援団総部が「そんなあなたを応援します～in EXPO～」を会場で披露した。応援団総部吹奏楽部も5月に「ブラスエキスポ2025」に参加し、音楽で会場を盛り上げた。

6月には工学部・巳波弘佳（みわひろよし）研究室が大阪ヘルスケアパビリオンに出展。新聞総部は本学OBの横山英幸大阪市長に取材を行い、万博への思いを取材した。加えて国内外4パビリオンの取材を会期末までに実施し、関学生に万博を発信した。

夏には、関学よさこい連「炎流」が「どまつりin大阪・関西万博」で演舞を披露。カナダパビリオンでは関学生とカナダの4大学の学生がビジネスプランを発表した。

8月22日には混声合唱団エゴラドが国連スペシャルデーに出演。9月21日には関西学院グリークラブが、クロアチア共和国ナショナルデーで歌声を響かせた。スペシャルデーやナショナルデーは、国や地域、国際機関が会期中にそれぞれ1日だけ開催する特別な日である。両団体は関係者の想像以上に式典を彩った。

また、関西学院交響楽団は9月に電力館野外ステージで、10月にはポップアップステージ西で特別ステージを披露。万博の終盤まで音楽で来場者を魅了した。

団体以外にも、パビリオンでのインターンや万博のボランティアで活躍した学生も目立った。

184日間にわたる万博の会期中、関学生は応援、研究、インターン、ボランティアといった多様な分野でその力を発揮。未来社会の共創を掲げる万博の理念を、学生たち自身の行動で体現した。

関学生は万博で培った経験をレガシーとして各々の団体や個人の活動に生かし、これからの社会に還元していく。世界とつながり、多様な価値観に触れた日々は、未来を担う力として学生たちの中に確かに刻まれた。（田爪翔）

「この経験を将来に生かしていきたい」

関学生が万博インターンシップで得た実感

多くの関学生が携わった大阪・関西万博。万博のスタッフとして来場者を迎えた2人に話を聞いた。

アメリカパビリオンのインターンシップに参加した新山岳さん（総合政策研究科修士課程1年）は4月13日の開幕から10月13日の閉幕まで、パビリオンの最前線で活動した。

パビリオンでは、館内ステージでの説明、列の整理など様々な業務に携わった。チームはアメリカ人スタッフ中心で、日々のやり取りは英語だった。国際色豊かな環境の中で、異なる文化や価値観を持つ人々と協力する力を身につけた。

特に印象に残っているのは、子どもたちと触れ合う時間だという。「シールを渡したり、笑顔で話しかけたりすると、自然と心が通じ合う瞬間がある。言葉を超えたコミュニケーションの力を感じました」と振り返る。

半年間の活動を終え、「最初は緊張の連続だったけれど、今は大きな達成感と少しの寂しさがあります」と新山さん。万博での経験を通して、国際社会の一員としての自覚を強くした。

最後に新山さんは「この経験を将来に生かし、世界をつなぐ仕事に挑戦したい」と、力強く語った。

アメリカパビリオンで活動する新山岳さん（左）＝本人提供

国際機関館（ASEAN）ブースのインターンシップに参加した酒入茉優さん（文学部3年）は、会期後半の約2週間、ブースで来場者を迎えた。

ブースでは英語でのコミュニケーションが中心。来場者の出身国によってアクセントや話し方が異なり、最初は戸惑うこともあったという。「相手の英語を理解することに必死でした。でも、伝えようとする気持ちは国を超えて通じることを実感しました」と振り返る。

また、自身のマレーシアでの留学経験も役に立った。「相手の言葉が少し聞き取りづらくても、あの時の経験を思い出して落ち着いて対応できました」と話す。

活動では、スタンプラリーや展示案内などを任された。特に印象に残っているのは、マレーシア留学の受け入れ先の機関の人とブースで出会ったことだという。「まさか日本でまた会えるとは思っていなかったので、世界ってつながっているんだなと感じました」と笑顔で話した。

短期間ながら、多文化の中で過ごした日々は、酒入さんにとって貴重な経験となった。「これからも英語を通じて、もっと多くの人とつながっていきたいです」と目を輝かせた。

国際機関館ASEANブースで活動する酒入茉優さん（右から2人目）＝本人提供

2人のインターンシップ参加のきっかけは国連・外交統括センターのインターンシップ情報の共有からだった。センターでは、国内外の国際協力関連団体から寄せられたインターン情報を学生に共有し、希望者には英文履歴書（CV）の作成支援や面接対策支援なども実施している。

今回の大阪・関西万博では、アメリカ領事館や日本アセアンセンター、国連ボランティア計画（UNV）など、センターと関わりのある団体が短期インターンシップを募集。関学生も数名が応募し、現場での活動に参加したという。担当者は「万博のために特別に企画したものではなく、あくまで既存のネットワークを通じた学生支援の一環」と説明する。

センターではこのほかにも、国連職員や卒業生を招いた講演会やシンポジウムを定期的に開催。今年は万博のために来日した国連職員が多く、例年よりも高頻度で実施したという。

「学生が実際に社会で働く中で、自分の長所や課題を知り、国際課題への関心を深めてほしい」と担当者。センターは今後も、学生が世界とつながる機会を後押ししていく。（田爪翔）

大阪・関西万博全図

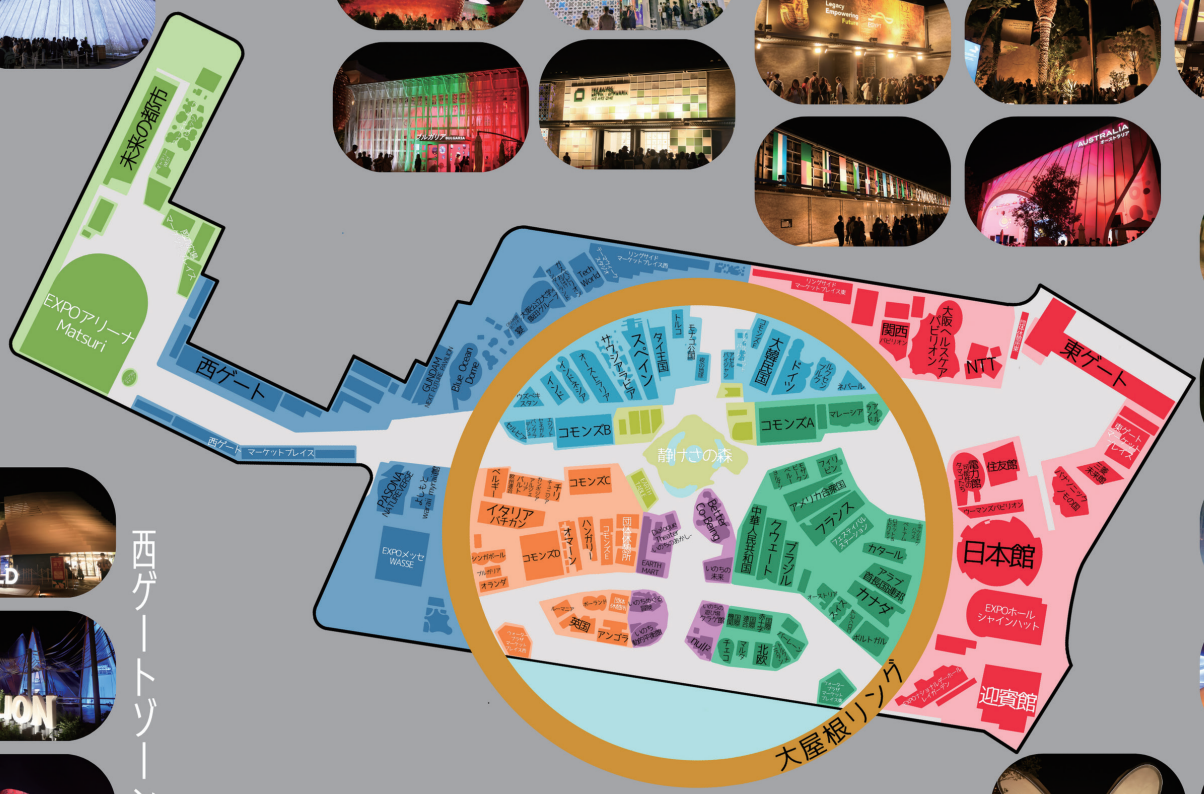
EXPO 2025 4/13-10/13

セービングゾーン

コネクティングゾーン

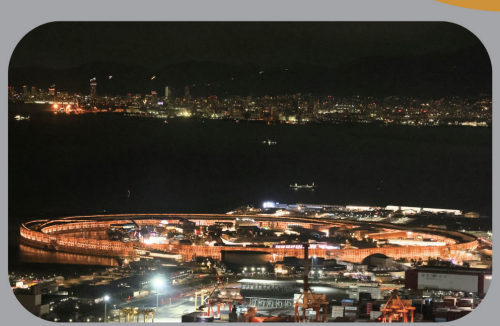
東ゲートゾーン

フューチャーライフゾーン



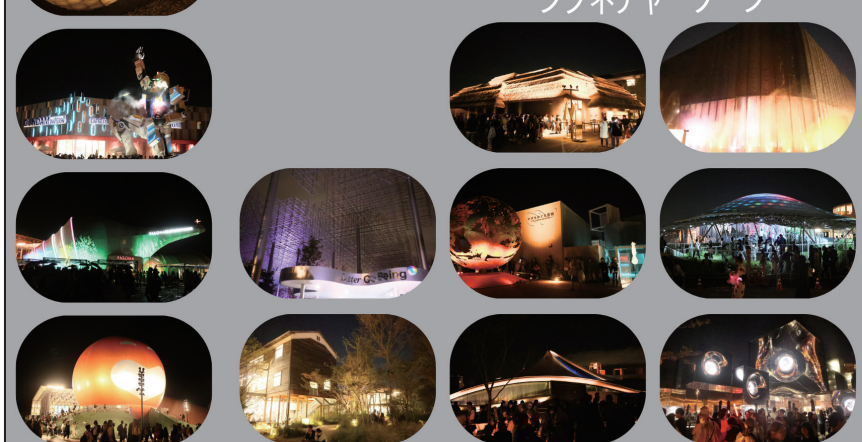
西ゲートゾーン

大屋根リング



エンパワーリングゾーン

シグネチャーゾーン



わたしのふるさとお伝えします
～愛媛県編～

四国・愛媛の魅力大発見!!

一泊二日で巡る「穴場愛媛」モデルコース考えてみた

電車で巡る愛媛の観光モデルコースについて紹介する。

【1日目】新幹線で新大阪駅を出発して、岡山駅まで移動する。その後、特急で松山駅まで向かう。次は路面電車に乗り、道後温泉駅で降りる。駅の近くにある「道後いなりゆのや」でいなり寿司をテイクアウトして、近くの道後公園で食べる。「道後いなり ゆのや」は、赤いのれんが目印で、甘くバラエティに富んだいなり寿司で評判だ。

道後公園は、伊予国の守護であった河野氏が居城としていた「湯築城」の城跡があり、資料館もある。しばらく歩くと「石手寺」がある。「石手寺」には国宝の仁王門のほか、金剛力士像や本堂などの重要文化財がある。他にも、四国遍路の全ての札所の砂を触ることができるなど、様々な見どころがある。再び歩くと「圓満寺（まんじ）」がある。

「圓満寺」は恋愛成就のパワースポットとして知られており、道後温泉のシンボルマーク「湯玉」をモチーフにした「お結び玉」や「俳句恋みくじ」などが販売されている。

「道後温泉 空の散歩道」では、街の景色を一望しながら、無料で足湯を楽しめる。「道後温泉 空の散歩道」は朝6時からオープンしているため、朝に足湯を楽しむのもおすすめだ。

【2日目】道後温泉駅から大街道駅まで行く。大街道駅からロープウェーに乗り、長者ヶ平から「松山城（本丸広場）」まで歩く。「松山城」は、日本の城の天守のうち、江戸時代かそれ以前に築城され、現代まで保存されている12の現存天守の一つである。城内には21棟の重要文化財があり、全国的にも珍しい、「登り石垣」などが見どころだ。

「松山城」の麓の「松山ロープウェー商店街」の中には「宇和島鯛めし もとやま本店」がある。宇和島鯛めしとじゃこ天がおすすめのメニューだ。宇和島鯛めしは、しょうゆやみりんなどで調味した タレに漬け込んだ生の鯛の切り身をそのままご飯にのせて食べる。

ロープウェー乗り場から少し歩くと、「坂の上の雲ミュージアム」がある。司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」では、松山出身の秋山好古・真之兄弟と正岡子規の3人の生涯を通して、明治の日本が描かれている。ミュージアムには、小説に描かれた主人公3人の足跡や明治という時代に関する展示などがある。

そこから大街道駅まで歩き、大街道駅からJR松山駅に向かう。その後、特急で松山駅から岡山駅まで移動し、新幹線で岡山駅から新大阪駅へ戻る。

愛媛県には様々な魅力がある。電車で行っても楽しめるので、ぜひ気軽に足を運んでほしい。

（今村早織）

愛媛県出身記者がふるさとの魅力語ります!!

愛媛県といえば、松山城や道後温泉、しまなみ海道などが全国的に有名だ。しかし「南予」と呼ばれる愛媛県南部の地域にはまだまだ知られていない名所がたくさんある。

まず、南予を語るうえで外せないのが「宇和島鯛めし」。一般的な鯛めしといえば、炊き込みご飯のスタイルが頭に浮かぶが、宇和島の鯛めしは全くの別物。愛媛県の名産である新鮮な鯛の刺身を特製のたれと生卵に絡め、熱々のご飯に乗せていただくのだ。

宇和島市の中心部にある「ほづみ亭」はその本場の味を堪能できる代表格といえる。観光客はもちろん、地元の人も日常的に訪れる名店であり、鯛のコリコリとした歯ごたえや濃厚なたれの旨味は一度食べたら忘れられない。愛媛県、特に南予を訪れたらぜひとも足を運んでもらいたい名店だ。

山間部の鬼北町にて行われている「安森洞そうめん流し」はまさに夏の風物詩といえる。自然由来の清らかな水を使った流しそうめんは冷たさと爽快感が格別だ。豊かな自然の中でそうめんを楽しむ時間は、都会ではなかなか味わうことができない。

近くでは川遊びのスポットもあるなど、自然豊かなレジャーにも最適。暑い夏には地元の人も多く訪れており、文字通り隠れた名所と言える。

森の国ともいわれる松野町にある「ぽっぽ温泉」は、JRの予土線の松丸駅に直結している珍しい温泉施設だ。そのアクセスの容易さやその魅力から、多くの人気を獲得している。

泉質は柔らかく肌に優しいアルカリ性単純温泉。地元の人が日常的に通う憩いの場でありながら、観光客にとっても南予の温かさを直接感じることができる。また、同施設内の売店には地元の柑橘や特産品があり、一見の価値がある。

多くの名所にあふれている愛媛県南予地区。なによりも心に残るのは「人の温かさ」だ。一期一会のなかにある心遣い、優しさに満ちたふれあいが南予には確かに存在している。ぜひ、南予の名所を楽しんでみてほしい。

（宇和島市出身・宝本拓夢）

関西から一晩で行ける旅先として、愛媛県東予地方が注目を集めている。大阪南港から出航している夜行フェリー「オレンジフェリー」に乗れば、翌朝には東予港に到着する。今回は、移動時間を有効活用しながら、学びと体験を両立できる1泊2日のモデルコースを紹介する。

【1日目】今治で歴史と産業に触れる

早朝、東予港に到着し、バスで今治市内へ向かう。まず訪れたのは「今治城」。海に面した城郭は、慶長7年（1602年）、藤堂高虎によって築城開始され、慶長9年（1604年）に完成した。構造は、三重の堀に海水を引き入れた特異な構造で、当時は海から堀へ直接船で入り、船が停泊できるほどの池が敷地内にあるなど瀬戸内海の海上交通の要所である今治らしく海を最大限に活用した城となっており、日本三大水城の一つに数えられている。続いて訪れるのは「タオル美術館」。今治タオルの製造工程やデザインの工夫を紹介する展示があり、地域産業の奥深さを感じさせる。また、常設展では、「ムーミンの世界へ」、「キャシー中島の世界」（2025年10月現在）、企画展では、様々なキャラクターや芸術家のタオルアート作品を堪能できる。館内にあるショップでは、ハイクオリティなタオルを展示販売している。また四国中の名産品も一同に揃っており、おみあげは、ここで購入するのがおすすめだ。

昼食には、地元のB級グルメ「焼豚玉子飯」を堪能。甘辛いタレが絡んだ焼豚と半熟卵がご飯の上に乗ったこの一品は、今治市民のソウルフードとして親しまれている。特に名店と言われる「白楽天今治本店」にはぜひ行ってみてほしい。

午後は、しまなみ海道でのサイクリング体験。サンライズ糸山で自転車をレンタルし、来島海峡大橋を渡る爽快な海の旅へ。瀬戸内海の多島美を眺めながらのライドは、写真映えも抜群なスポットが多くある。

【2日目】新居浜・西条エリアで地域の歴史と自然を体感

2日目は新居浜市へ移動し、かつて日本最大級の銅山として栄えた「別子銅山」の跡地を活用したテーマパーク「マイントピア別子」へ。砂金採り体験や産業遺産の展示を通じて、地域の歴史と経済の変遷を学ぶことができる。石垣やレンガで造られた建物のイメージと、高所にあることからその姿が『東洋のマチュピチュ』と呼ばれ、多くの観光客を集めている。標高750㍍前後のこの場所からは、天気の良い日には瀬戸内海を見渡せる絶景地である。

西条・新居浜エリアでおすすめの食事処は、「マルブン小松本店」だ。熱々の鉄板の熱で卵がだんだん焼けて香ばしく、昔ながらの喫茶店のナポリタンのような甘酸っぱく懐かしい味がする。最近、南予の「活き」鯛めし、中予の「炊き」鯛めしに続く第3の鯛めしとして、『東予・洋風焼き鯛めし』が誕生した。ハイカラ感のある味わいが特徴だと人気を博している。

夜は再び東予港からフェリーに乗り、船内でゆったりと過ごしながら大阪へと帰路につく。展望風呂や個室も完備された船内は、動くホテルのような快適さで、旅の締めくくりにふさわしい時間となるだろう。

地域の文化・産業・自然に触れることができる「学びの旅」。多くの方々に愛媛県・東予地方の魅力を感じていただければ幸いだ。

（松山市出身・越智優介）

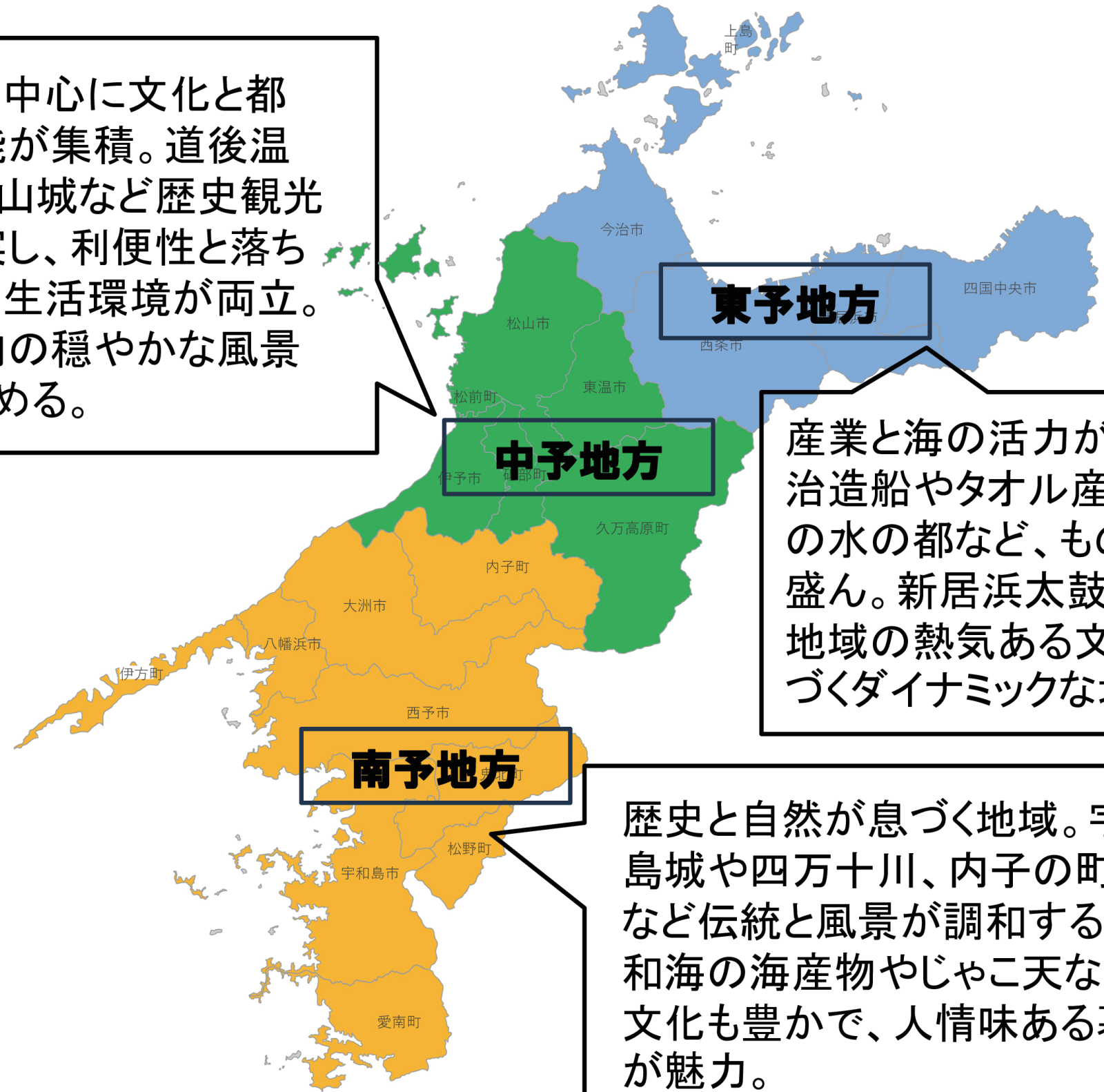
今回は、部員のふるさとの魅力を発信するということで、越智優介記者・宇本拓夢記者の出身地である愛媛県について紹介する。

愛媛県は四国の北西部に位置し、瀬戸内海の穏やかな気候に恵まれた地域であり、東西に長い地形が特徴で、北は瀬戸内海に面して温暖、南は、四国山地が広がり、自然豊かである。

県庁所在地の松山市を中心とし、東温市・松前町・伊予市・砥部町・久万高原町で構成される中予地方は、日本最古級の温泉・道後温泉や、松山城をはじめとする歴史資源が集まる。また、松山は「文学のまち」として知られ、夏目漱石の小説「坊っちゃん」や司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」の舞台となっている。他にも、俳人の正岡子規や高浜虚子など数多くの文人を輩出している。

今治市・西条市・新居浜市・四国中央市・上島町で構成される東予地方は、第二次産業が盛んで、特に今治市は、タオル産業の一大産地として知られている。また「しまなみ海道」を通じて広島とつながるサイクリングの聖地であり、世界中から注目を集めている。

伊方町・大洲市・内子町・西予市・宇和島市・鬼北町・松野町・愛南町で構成される南予地方は、昔ながらの町並みや文化、海と山が近い生活風景が残っており、都市部とは違った「素朴な愛媛の魅力」を味わうことができる。また、面している宇和海沿岸では、リアス式海岸を利用した養殖業が盛んで、マダイやシマアジ、真珠、真珠母貝は、日本一を誇る。



松山を中心に文化と都市機能が集積。道後温泉、松山城など歴史観光が充実し、利便性と落ち着いた生活環境が両立。瀬戸内の穏やかな風景も楽しめる。

産業と海の活力が特徴。今治造船やタオル産業、西条の水の都など、ものづくりが盛ん。新居浜太鼓祭りなど地域の熱気ある文化も息づくダイナミックな地域。

歴史と自然が息づく地域。宇和島城や四万十川、内子の町並みなど伝統と風景が調和する。宇和海の海産物やじゃこ天など食文化も豊かで、人情味ある暮らしが魅力。

教授の背中 新任学部長はどんな方？
第2回 伊勢田道仁法学部教授

今年の4月から新たに学部長に就任した先生方にインタビューをする連載の第二弾として、法学部長の伊勢田道仁教授にお話を伺った。

伊勢田教授は会社法、金融商品取引法が専門である。

―専門分野に興味を持った理由

世の中の経済と法律の結びつきに興味があったことから、現在専門としている分野に興味を持った。

―研究テーマの一つのコーポレート・ガバナンスについて

ダスキン株主代表訴訟事件をきっかけに関心を持った。ミスタードーナツを運営するダスキンの役員が販売していた食品に日本では認可されていない添加物が含まれていると知りながら、それを隠蔽したことが後日明らかとなった事件だ。近年でも、アメリカのボーイング社の事故など、安全に関するコンプライアンスが問われる場面があった。株式会社は便利な制度だが、コンプライアンスが欠けると深刻な事態に陥ってしまう。

―弁護士として

20年ほど前から大阪弁護士会で弁護士登録をしている。株主代表訴訟や投資者訴訟のみならず、行政事件訴訟や一般民事事件にも取り組んでいる。具体的には、個人タクシーの初乗り運賃やコンテナに対する課税に関する行政訴訟に取り組んだこともある。

―法学部について

関学大の法学部では、法曹養成に加えて、企業法務人材の育成と留学の推進にこれから力を入れていきたいと考えている。

法学部では、現在も企業法務に特化した授業を行っているものの、企業法務担当者との研究会を行うなかで、企業法務人材の不足を感じており、さらに力を入れる必要を感じている。

留学については、文化や言語のコミュニケーションの学習を中心とする留学だけでなく、外国語を使用して専門的な勉強を行う学部間留学についても推進を考えている。現在は、エディンバラ大学春季法律英語研修と中国人民大学法学院交換留学プログラムがあるが、さらに他の国の大学とも協定を結びたいと考えている。

伊勢田道仁教授＝本人提供

―学生へのメッセージ

伊勢田教授は「現在の社会や経済などの状況がいつまでも続くとは限らない。日本にいると分からないが、海外に出てみると気づくことがあると思う」と話す。

また、「失敗を恐れず、ある程度のリスクをとって挑戦してほしい。自分のことを助けてくれる人や見てくれている人は必ずいる」と力を込めた。（今村早織）

教授の背中
藤井亮佑先生
遺品整理業からみる「死が消滅する社会」

藤井亮佑先生（社会学部・経済学部非常勤講師）は、死の社会学を研究している。2025年2月には「死が消滅する社会―遺品整理業をめぐる死とモノの社会学」を執筆した。

藤井先生は2011年4月に関学大社会学部に入学した。入学直前の3月、東日本大震災が起こった。当時、津波の被害で浜辺に多くの遺体があるという報道を見て、大きなショックを受けた。「人間社会がどのようにたくさんの亡くなった人と向き合わないといけないのかが、自分の中で完全に空白だという体感がすごく強かった」という。この経験から、卒業論文で社会学の中で人の死を扱おうと考え、終活の研究を行った。そして、大学の4年間では「何者にもなれなかった」と語る。

大学卒業後を見据えて何かをしようとは思っていたが、社会に出て人の役に立つ自信がなかった。自分の未熟さに苛まれたが、大学院では身に着けられる何かが確実にあると考え、進学を決意した。

大学院では死の社会学の研究に取り組んだ。研究の問題関心が明確ではなかった中、遺品整理業が社会学では研究されていないことに気づいた。

人はモノと共に生活している。特に消費社会においては、モノ自体も含めて「死者の処理」として捉えなければいけない。そのため、社会学の分野で遺品の問題に触れられないこと、遺品整理業が調査されないことに不満を感じた。そして社会が人の死を処理する方法について理論を作ろうと考えた。

遺品整理業は、他者の死を業者に任せ、すべて片付ける社会システムである。人が死んだという意味を消滅させながら、人が生きた痕跡や死の痕跡を消し去るような業態である。そのため、遺品整理業に着目することで、死が表面化することなく容易く無意味化する「死が消滅する社会」を明らかにすることができたという。

藤井亮佑先生 =10月8日、西宮上ケ原キャンパス、山須田優撮影

こうした研究を経て、現在は様々な大学などで教鞭を執っている。学生にとって就職活動と大学の勉強との関わりを感じることが難しい中、学術的な関心がある学生と出会えることは気持ちがいいという。そして、学生の好奇心を育み、問題関心を深めることに貢献したいと考えている。

学生に向けて、「一人ひとりの研究関心は、これからの人生で常に問い直され続ける。だから、自分自身や自分の関心を探究することをやめないでもらいたいし、やめる必要もない」とメッセージを送った。（山須田優）

全文はこちらから

ギャラリーレポート
第7回正倉院展 奈良国立博物館

奈良時代から時を超えて伝わる聖武天皇ゆかりの品など、数々の宝物が出展する「第77回正倉院展」が奈良国立博物館（奈良市）で開催。

今回の見どころは、「蘭奢待（らんじゃたい）」として広く知られる香木「黄熟香（おうじゅくこう）」だ。格別な存在感を放つその巨木には多くの切り取られた痕があり、時の権力者が名香を求めたことがうかがえる。

そして、正倉院の代表的な宝物である「瑠璃坏（るりのつき）」は13年ぶりの出展だ。紺青色の気品あふれるガラス器で、表面に張り付けられた円環の文様や銀製の台脚からは異国情緒が感じられる。このようにシルクロードとの交流をうかがわせる品は多く、「平螺鈿背鏡附題箋（へいらでんはいきょうふだいせん）」が代表的だ。ヤコウガイを用いた螺鈿で華やかな文様が表され、トルコ石やラピスラズリが埋め込んであり、きらびやかな一品だ。

また、色とりどりの双六や動物の毛や皮を使った投げ矢など、華やかな宮廷生活で使われた品も展示していた。

「木画檀双六局（もくがしたんすごろくきょく）」は聖武天皇が愛用した双六盤と伝わる。ツゲやコクタン、象牙などの上質な素材が使われ、鳥や唐草の細やかな装飾文様が施されている。

第1章から第8章にかけて67品が並び、宮廷世界や儀礼、染色や工芸の伝統的技法など、天平文化の奥深い世界を堪能することができた。（森友紀）

公務員について若いうちからアンテナを

関西学院大学は10月3日、教務機構事務部生涯学習課と資格会社のTACが主催をしている「ゼロから教えて！公務員ガイダンス」を西宮上ケ原キャンパスH号館302教室で行った。

「ゼロから教えて！公務員ガイダンス」は資格取得・各種試験対策の支援を目的に2005年から始まった「関西学院大学エクステンションプログラム」の一環で実施している。このガイダンスでは大学1・2年生を対象に大学職員（生涯学習課、キャリアセンター）およびTAC担当者が公務員試験の「仕事・試験説明会」と「Q&A」を行っている。

当日は学生が約20人参加した。最初にTAC担当者が公務員の種類と仕事内容や公務員試験の概要、民間企業と併願する際の注意点を説明した。

公務員を志望する学生の志望動機について、TAC担当者は「明確な理由をもって公務員を志望する人もいる一方で、何となく公務員を志望する人も一定数いる」と語った。その上で「受講者には受講を通じて進路に関して公務員だけではなく様々な選択肢を知って欲しい」とガイダンスを開催する目的についても口にした。

その後、大学職員からは学内でのサポート体制についての説明を行った。キャリアセンターではコミュニケーションツールSlack（スラック）を用いた大学内外で実施するイベント情報の発信、kwic内のKGキャリアナビから先輩など幅広いサポートが利用できることを紹介した。

Q&Aの時間では学生の就職活動に関する悩みに対してTAC担当者と大学職員が一つひとつ丁寧に真正面から向き合って答えていた。

最後に学生へ、生涯学習課は「将来何が必要かというのを自分自身でアンテナを張って情報収集して欲しい」、TAC担当者は「最初から選択肢を決めつけないで多くの物事に興味関心を持って色々な経験を積んで欲しい」とそれぞれ笑顔でメッセージを送った。（佐藤朝陽）